ちかみちよりも...

- Contents -

１ 活活算数
伝説の算数教科書

２ 活活寄席
活活寄席ご案内と報告

３ 大人が読みふける児童文学
『ふたりのロッテ』

１０月１３日現在で、算数教室３名、落語教室１名、両教室１名の子どもたちが通ってきています。秋は思考力検定、数リンピックと力試しの季節でもあります。無料体験も随時受け付けています。詳しくはホームページhttps://katsujuku.netをご覧ください。

塾長の活活（いきいき）算数　第2回
伝説の算数教科書①

現在検定合格している算数の教科書は六社ありますが、戦前は文部省図書監修官が国定教科書としてたった一つの教科書を作成していました。

その国定制度下において、のちに伝説の算数教科書と呼ばれるものが誕生しています。それは、昭和十年から使われた『尋常小学算術』通称緑表紙本と呼ばれるもので、島根県出雲市出身の塩野直道先生によるものでした。

この教科書が「伝説の…」と呼ばれるようになったのは、昭和十一年にノルウェーオスロで開催された国際数学者会議において絶賛を博したからです。

その世界から認められた伝説たるゆえんはいくつもありますが、まずはその美しさに目を見張ります。私は平成二十年に再復刻版を求め、手にしましたが、その時の感動を忘れられません。

小一上は挿絵の範疇を超えた絵と数字のみで、説明的な文章は一切ありません。二分かけてパラパラめくってみても感動しますが、二か月かけて授業することを想像するとワクワクが止まりません。一言の説明がなくても、むしろ、ないからこそ数理思想を育む扉をどう開けてどう歩み出すべきかが明確に示されていると思います。

私の教育観も変わりました。百八十度変わったという転換点ではなく、照準が零点二度ほど補正されたような感覚です。今後も精度を究めて算数と向き合います。

では、伝説たるゆえんの二つ目は、…

（塾長　川上宣久）

ところがルイーゼとロッテは大胆な計画をたてるのです。髪型をかえて、ロッテはウィーンの父親の元へ、ルイーゼはミュンヘンの母親の元へ、入れ替わって帰ろうというのです。性格の違いから気づかれてしまうかもしれません。それでも、覚えていないもうひとりの親に会ってみたいと考えるふたりの気持ちは痛いほどにわかります。「私のお父さんは（お母さんは）どんな人？」「どうしてふたりは別れたの？」「子どもだって知る権利があるのよ！」ふたりの心がそう叫んでいるように感じて、ドキドキしながら読んだ覚えがあります。そして、この思いきった行動が両親を巻き込み、ばらばらになっていた家族に思わぬ展開が待っています。

初読から五十年たってもう一度読んでみましたが、やっぱりおもしろかったです。今回は、双子の気持ちだけでなく、大人の気持ちにもなりながら読んでいる自分に気づきました。子どもが読んでも大人が読んでも、それぞれのドキドキ感がある物語です。

（『ふたりのロッテ』　エーリヒ・ケストナー作　岩波少年文庫　小学４・５年から）

児童文学愛好家　天野和子

※次回の大人が読みふける児童文学は、スティーブンソンの『宝島』です。

〒690-0871松江市東奥谷町386-7　☎0852-67-8005　0852-67-8015　https://katsujuku.net　info@katsujuku.net
松江算数活塾

第4回
活活寄席

里みちこ詩展 ―いのちの四季― 11/18～20

会場「あいえんきえん」はこんなところです

↑ 真ん中に見えるのが母屋、向かって右が納屋、左が離れ。周囲は田んぼと里山です。里さんの詩は、納屋と離れを中心に展示する予定です。仁多米やおもしろ文具の販売も。

↑ 離れの縁側。離れの様々なところに作品が展示してあるので、それを見ながらここでコーヒーなんていかがでしょう。目を転ずれば窓の外は晩秋の閑かな里山風景が広がっています。

↑ 母屋。ここで里みちこさんやお友達、出会った人とお茶でも飲みながら語り合ってください。オーナー手作りのスイーツもあります。心にとまったことばを思いつつ、のんびりゆったりお過ごしください

第3回
活活寄席

ゲスト真打ち

立花秀明さん（和彩空間たち花）

十月一日、テクノアークしまね大会議室を会場に第3回活活寄席を開催しました。塾長副塾長の前座の後、ゲスト真打ちに奥出雲町の「和彩空間たち花」店主の立花秀明さんを迎え、ご自身が料理監修を務めるJR西日本トワイライトエクスプレス瑞風の他では味わうことのできない、一切の妥協を排した料理についてお話を聞きました。実際に乗客に供されるまでどれだけの手間暇がかかるものかお話を聞くと、最安が一泊二日三十うん万円、スイートだと二泊三日で一人百三十万円！というのも宜なるかな。とは言え、ため息の出るような料金ですが、ひとたび経験すると「安い！」になるとか。

お話の後は、サプライズの試食。これには参加者一同大喜びでした。何が出たかはここに書けない事情あり。次回はぜひ、ご自分の舌で味わってください。

大人が読みふける児童文学②

ふたりのロッテ

ケストナーの作品をもう一冊紹介したいと思います。ケストナーがナチスによる迫害を受け、出版を禁じられていたことは前回書きました。やっと戦争が終わり、『ふたりのロッテ』は一九四九年に出版されました。

美しいビュール湖のほとりにある少女のための宿泊施設。ここで夏休みを過ごすルイーゼの前に、自分とうりふたつの少女ロッテが現れるという衝撃の出来事から物語は動き出します。

この本を私は小学校高学年の時に読みました。その頃は双子で生まれること自体が不思議で特別なことと思っていました。しかもルイーゼとロッテはお互いの存在を知らずに、九歳で奇跡的に出会うのです。顔はそっくりだけど、性格には違いもあります。巻き毛をたらしたルイーゼ・パルフィーは、ウィーンで父親と暮らすおてんばな子。おさげをきちんと結ったロッテ・ケルナーは、ミュンヘンで母親と暮らすまじめな子。初めこそ戸惑いますが、急速に仲良くなっていくふたり。互いの生まれた日や場所が同じだとわかり、自分たちが双子だと確信します。一方で両親の秘密も明らかになっていきます。

私は五歳頃の記憶がけっこう残っているのですが、両親が話していた親戚の家の問題や実家の商売のことなど、大人が思う以上に理解していました。同時に、大人の事情に子どもが口をはさむのはいけないことだと思っていました。

（裏面に続く）